



全日本実業団剣道連盟会長  
鬼澤正

百 錬 自 得

このほど三井住友海上は、神田駿河台の本社ビル地下に剣道場を新設し、11月16日道場披露式典を催し、私も招かれた。新道場は「百練館道場」と命名された。これより先、旧住友海上は、昭和42年神田錦町のビルに剣道場を開設していたが、平成3年に至りこの道場を「百練館道場」と命名しており、今回の道場名はそれを踏襲したものだ。当初「百練館道場」と命名したのは、剣道部員の要望によったものだという。偶然かもしれないが、「百練館道場」という名には、練の字の違いはあるもの

の、剣道史上特筆すべき先例がある。

当時、関東実業団剣道連盟会長だった私は、平成13年3月11日一橋大の剣道部創設百周年記念式典に招かれた。その節、同大出版の『剣聖・山田次朗吉先生の生涯』という伝記を頂戴し、直心影流第15世山田次朗吉が、明治34年5月、一橋大（当時東京高等商業）剣道部初代師範に就任し、爾来昭和5年1月同氏が死去するまで30年に亘り同大剣道部師範であったことも知った。

山田師範は、直心影流第14世榊原健吉の下谷車坂の道場に通い免許皆伝を得、明治27年9月榊原の

死去に伴い同流第15世を継いだ。榊原は明治20年11月、胴田貫の一刀をもって南蛮鉄桃形兜割りの秘技を天覧に供し名を馳せた人。

その榊原は、元治元年7月直心影流第13世男谷精一郎の後を継ぎ、明治3年車坂に道場を開いた際、勝海舟より「百練自得」の扁額を贈られ道場に掲げていた。この道場は明治37年市区改正で閉鎖を余儀なくされ、彼の後を継いだ山田師範は同年秋、本郷竹町に道場を新設し、道場名を「百練館道場」としたのである。海舟の「百練自得」からとったものだ。しかし、この道場も時勢に抗し難く、ほどなくして廃場の運命を辿った。

幕末、尊攘論で物情騒然、京都で暗殺が横行していた時、油小路北三井邸に滞在中の福井藩主松平春嶽が海舟の一身を氣遣い、壮士15名を護衛にと申し出た際も「予は少壮いささか剣道を修め自ら多少得るところあり、たとえ浪士数輩の子を襲うことあるも、予はもとより恐るるに足らず」（『海舟座談』岩波文庫）といってこれを丁重に断っている。

勝海舟と直心影流との縁は深い。同流第13世男谷精一郎は従兄に当たり、生まれたのも本所亀沢の本家男谷邸だ。しかし海舟は精一郎のすすめで、18歳の頃より浅草新堀にあった男谷門下の島田虎之助（豊前中津藩士）の道場に住み込み、自ら薪水の労をとって修業、21歳で免許皆伝を受けた腕前であった。後に海舟自ら「おれの家は剣術の家筋で、本当に修業したのは剣術ばかりだ」（『氷川清話』角川ソフィア文庫）といい、さら

「百練自得」の扁額は、その後山田が所有し自宅の2階に掲げていたという。海舟のこの熟語は、彼自らの厳しい剣道修業体験から絞り出された言葉である。私はこの「百練自得」という言葉に感銘し、関東実業団剣道連盟会長に就任したとき、大会記念の手拭にこの4文字を揮毫したこともあった。

「百練自得」とは、文字通り修練を重ねて、自らその道・技を体得するということだ。それには、不屈の精神力と実行力が必要不可欠である。私は、剣道修業の極意は、「百練自得」の4文字に尽きるのではないかと思う。新たに剣の道を志す者を含め、剣道修業中のすべての剣士たちの座右の銘に、この一語をすすめる。